

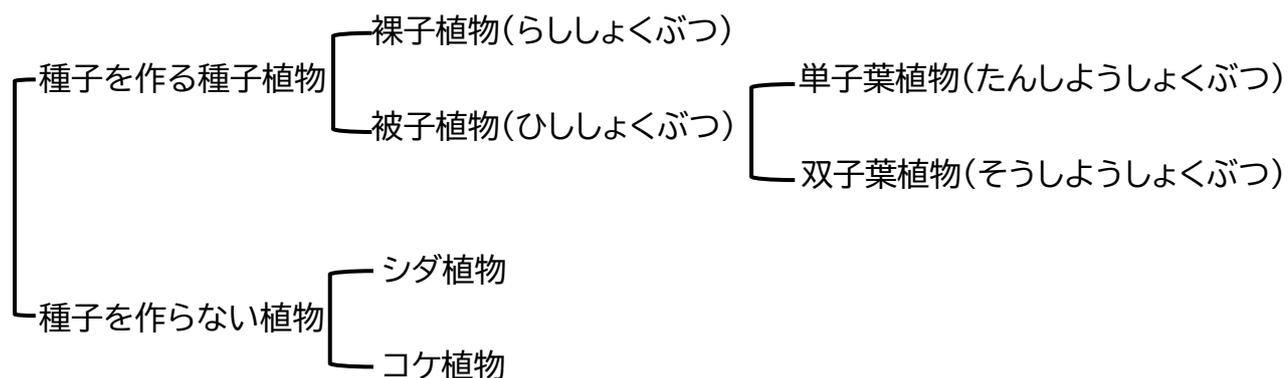
自然観察サークル2月定例会ブログ



2月定例会は桜井市の近鉄大福駅から橿原市の耳成駅までのコースで、主に横大路(伊勢街道)と言われる古い道界隈にある寺社をめぐる樹木、主に裸子植物(らししよくぶつ)の観察をしました。

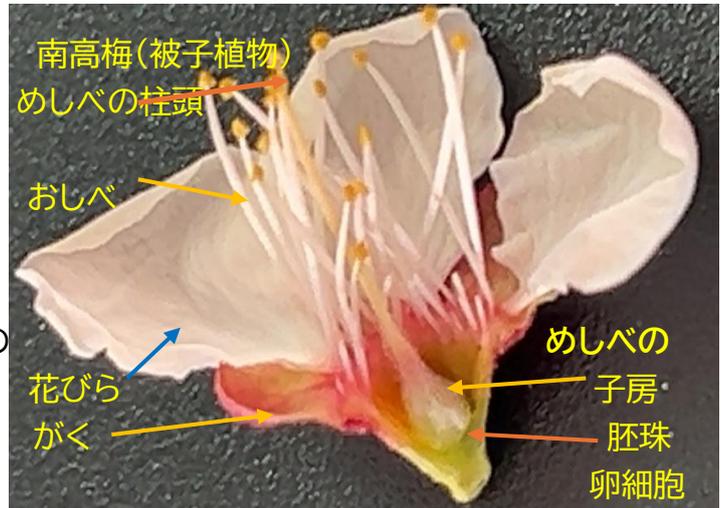


裸子植物について、中学生のころを思い出してちょっと復習!?
増え方の違いで植物を分類すると、種を作る種子植物と種を作らない植物の二つに大きく分けることができます。



裸子植物(らししょくぶつ)とは、マツ、スギ、イチヨウ、ソテツなどのように、胚珠(はいしゅ)が子房(しばう)に包まれず、むき出しの状態についている種子植物です。花びらやガクはなく、雌花と雄花で受粉し、果実は作らずに種子ができます。

被子植物(ひししょくぶつ)では胚珠は子房の中にあり、覆われています。



観察した植物

裸子植物

裸子植物は、ジュラ紀(中生代の真ん中、約2億年前から1億4500万年前)に繁栄した歴史の古い植物群です。今、裸子植物で最も繁栄しているのはマツやスギのようなマツ目の針葉樹群です。



ソテツ



マツ



コノテガシワ



ヒノキ



カヤ



イヌマキ



イチヨウ

被子植物



ソシンロウバイ ウメ



ソテツ(裸子植物 ソテツ科)

常緑低木。幹には年輪がない。

羽状複葉。雌雄異株。右の写真は雌木。

ドウム型の花をつけています。普通花期は夏で数年～十年に一度開花。しかしこのソテツは2月の今花が残っています。ソテツの種子は熟ると朱赤になりますが、完全に熟すには年単位の時間が必要な場合もあるようで、種子が熟すのは秋から翌年以降になるようです。

深い切れ込みのある大孢子葉の根元に2～6個の胚珠をつけますが、写真の花は大孢子葉の根元の胚珠がまだ未熟のようです。





ゴヨウマツ(マツ科)常緑高木。葉は青みを帯びた緑色で、長さ 5 cm ぐらいの針状の葉が短枝に 5 個ずつ束になって生えます。



ダイオウマツ(マツ科)
葉は短枝に 3 個ずつ束生します。

イチヨウ

裸子植物。雌雄異株。

イチヨウ属では唯一現存する「生きた化石」と呼ばれています。

イチヨウのギンナンは実と呼ばれることがありますが、これは種子です。外側の臭い部分は外種皮で内の硬いのが中種皮、ギンナンの薄皮は内種皮だそうです。食べるのは胚乳の部分です。

イチヨウは生命力の強い木です。新芽を伸ばす枝は勢いよく伸びて葉を互生させる「長枝(ちょうし)」と、ほとんど伸びずに葉を束生させる「短枝(たんし)」があります。花は短枝に多くつきます。



被子植物のソシンロウバイとウメ



満開のソシンロウバイの観察(ロウバイ科 落葉低木)



満開のウメの観察(バラ科 落葉高木)



ソシンロウバイの花 左から開いたばかりの花で右にいくと開いてから時間が経った花になります。ロウバイには雌性先熟という仕組みがあって「雌性期」と呼ばれる頃はめしべの柱頭が露出しています。花が咲いてから 2~3 日たつと「雄性期」と呼ばれる時期になりおしべがめしべを包み込むように立ち上がってめしべは隠れ、おしべの葯の外側が裂けて花粉が放出されます。



イヌマキ(裸子植物 マキ科)
常緑針葉樹高木、雌雄異株



コノテガシワ(被子植物 ヒノキ科) 十字対生する葉
常緑針葉樹高木 コノテガシワ属の唯一の現生種



カヤ(裸子植物 イチイ科)
常緑針葉樹高木 雌雄異株



ヒノキ(裸子植物 ヒノキ科)葉の表



葉の裏(Y字の気孔帯)



ヒノキの球果



2月だけれどちょっと暖かい日で、歩くのにはちょうどいい日でした。回っていったのが昔からある神社やお寺だったのでとても落ち着いた雰囲気です。併せて針葉樹の大木が多かったので、その香りのせいで気持ちがよかったです。

歴史ある古い町で大切にされてきた木々、それを見て回ることができて幸せな気持ちになりました。

(樹に咲く花 山と溪谷社参照)